

<翻 訳>

叙事詩の宗教哲学 —Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (LXV) ¹—

茂 木 秀 淳 元信州大学教育学部

キーワード： 行為のダルマ，無活動のダルマ

[327 章] (B.340 章, C.13007-13128, K.349 章) (ナーラーヤナ章 (7) nivṛtti-pravṛtti)

ジャナメージャヤは言った²。

- (1) かの至尊の威光ある神は，どうして，もろもろの祭式において最初に（供物の取り分を）取る者（agraharaḥ）であると同時に，常にヴェーダとヴェーダの支分を知る者として，祭式の維持者（yajñadhārī）でもあるのですか。
- (2) 平穩で，バーガヴァタを好む³かの威光ある神は，無活動のダルマに住する一方で，（なぜ）もろもろの活動のダルマを規定したのですか。
- (3) なぜ，もろもろの活動のダルマの中で，（供物の）取り分（bhāga）に値する神々が創造されたのですか。その一方でなぜ，無活動をダルマとする神々が，それとは異なる認識をもつ者たちとして創造されたのですか。
- (4) バラモンよ，我々のこの疑問を，すなわち永遠の秘密を，断ち切って下さい。あなたは，ダルマを定めたナーラーヤナの物語を知っているのですから⁴。
- (5) ブラフマー神がいて，神々，アスラたち，人間たちを伴うこのもろもろの世界は，あらゆる点で繁栄（をもたらず）と言われるもろもろの祭式に（kriyāsu）固定されているのが見られます。そして一方あなたは，バラモンよ，それからの解放（mokṣa 解脱）は，涅槃であり，最高の安樂である，と説きました。

¹本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (LXVI)—』（信州大学教育学部研究紀論集第 12 号）に続くものである。略号などは前稿に準ずる。なお本稿で用いる主なものは下記のとおりである。

- Hopkins[1901]: E.W. Hopkins, "Yoga-technique in the Great Epic", JAOS. vol.22, 1901, pp.333-379.
- Buitenen[1964]: J.A.B.van Buitenen, "The Large Ātman", History of Religions 4, 1964, pp.103-114. (Studies in Indian Literature and Philosophy, Collected Articles of J.A.B.van Buitenen, ed by L.Rocher, 1988, pp.209-221)

²P. janamejaya uvāca B.,K.: śaunaka uvāca

³P. bhāgavatapriyaḥ B.,K.: bhāgavataḥ prabhūḥ

⁴B.,K. はこの詩節の後に，次の語と 2 行を挿入している。(=MBh.XII.861*)

sautir (861 * sūta) uvāca / (サウティは言った。)

janamejayena yat prṣṭaḥ śiṣyo vyāsasya (B. vyāsaś ca) dhīmataḥ /

(ジャナメージャヤ王によって尋ねられ，思慮深いヴィヤーサの弟子は，)

tat te 'haṁ kathayisyāmi paurāṇaṁ śaunakottama /B.5/

(「その古譚を私は汝に語るであろう，シャウナカの最高の者よ。」)

śrutvā mātmyam etasya dehināṁ paramātmanāḥ /

(身体ある者たちのこの最高我の偉大さを聞いて，)

janamejaya mahāprājño vaiśampāyanam abravīt /B.6/

(大英知のジャナメージャヤは，ヴァイシャンプーヤナに言った。)

janamejaya uvāca (K. omitted) / (ジャナメージャヤは言った。)

- (6) この世で善と悪とを離れ解脱した者たちは、千の光線をもつ神に⁵入る、とかつて私たちは聞きました。
- (7) ああ⁶、永遠の解脱のダルマは行うのが難しい。そのため神々はすべて、それを捨てて、神々や祖霊たちへの供物を享受する者となりました。
- (8) 一体なぜ、ブラフマー神、ルドラ、バラを殺した威光あるインドラ、太陽神、星宿の主、風神、火神、水神、虚空神と地神 (jagatī), そして他の天界に住む者たちは、
- (9) 自分に定められた消滅を (pralayaṃ 死) 知らないのですか⁷。それゆえ、永遠不滅の不動の道に立つことなく (tenāsthitaḥ),
- (10) 時間は限りあることを想起して⁸、活動に従事しています。これが彼ら時間の限定の中で活動する者たちの大きな欠点であります。
- (11) このように、バラモンよ、疑問が私の心に矢のように刺さっています。古譚 (itihāsa) を語ることによって、これを断ち切って下さい。私の探究心 (kautūhala) は大きいのです。
- (12) なぜ神々は、もろもろの犠牲祭において、取り分を取る者と言われるのですか、再生族よ。また何のために、バラモンよ、三天に住む者たちはソーマの供犠において (供物をもって) 祭られるのですか。
- (13) また、もろもろの祭式において取り分を取る神々は、最高の再生族よ、もろもろの大祭式によって祭式を行う時、(自分の) 取り分を誰に与えるのでしょうか⁹、最高のバラモンよ。
- ヴァイシャンパーヤナは言った。
- (14) ああ、あなたは最も奥深い質問を尋ねた、人々の主よ。この問いは、苦行を行わない者によっても、ヴェーダを知らぬ者によっても、ブラーナを知らぬ者によっても、正しく¹⁰答えることはできない。
- (15) それでは、わが師、ヴェーダの編者大仙クリシュナ・ドヴァイパーヤナ・ヴィヤーサにかつて私が尋ねたことをあなたに語るであろう¹¹。
- (16) (彼の弟子は) スマントゥ、ジャイミニ、そして固い誓戒のパイラ、四番目の弟子として私、五番目がシュカである、と伝えられている。(Cf.MBh.II.4.9, XII.314.24, 337.11)

⁵sahasrārçiṣaṃ devaṃ Cn. sahasrārçiṣaṃ, sūryāntaryāmiṇaṃ anantacidrūpaṃ vā / (sahasrārçiṣaṃ とは、太陽の内制者に、あるいは無限の心と姿をもつ者に、という意味である)

⁶P. aho hi B., K.: ayaṃ hi

⁷na vijānanti ātmanaḥ parinirmitam Sandhi irregular: vijānanti ātmanaḥ Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.3. Absence of kṣaipra-sandhi, 1.1.3.1. -i/ī a/ā, p.14.2.

⁸P., K.: smṛtvā kālāparīmāṇaṃ B. smṛtikālāparīmāṇaṃ

⁹kasya bhāgaṃ dadanti (Cf.Hopkins[Great Epic]: dadanti, careless writing, p.265.12)

¹⁰añjasā Ca. añjasā, tattvena / (añjasā とは、真実によって、という意味である)

¹¹hanta te kathayisyāmi Cf.Hopkins[Great Epic]: Parallel Phrases in the Two Epics, p.443, No.329. Cf.MBh.XII.329.2 (hanta te vartayisyāmi).

- (17) これら、感官の調御に従事し、清浄な行為に専念し、怒りを抑え、感官を抑えた五人の弟子たちに、彼らがすべて集まった時、
- (18) シッダとチャーラナたちが仕える心地よきすぐれた山、メール山において、『マハーバーラタ』を五番目とする¹²もろもろのヴェーダを教えた。
- (19) ヴェーダを実修している彼らに、ある時疑問が生じた。それはまさにあなたが尋ねたものであって、彼（ヴィヤーサ）は彼らに対して提示した。私は今あなたに語るべきことをそこで聞いたのである、バーラタ族の者よ。
- (20) 弟子たちの言葉を聞いて、あらゆる無知の暗闇を除く、パラージャラの息子、吉祥なヴィヤーサは（次の）言葉を語った。
- (21) 「私は、過去・現在・未来を知ることができるようにと、大変大きな、最も厳しい苦行を行った、最高の者たちよ。
- (22) そのような苦行を行い、感官を制御した私に、ナーラーヤナの恩寵によって、乳海の岸近くで¹³、
- (23) 三時に関するこの知識が望み通りに生じた。汝らそれを聞くがよい。この知識に従って¹⁴、最高の疑問について語るであろう。劫の最初にどのように生じたのか（yathā vṛttam）、知眼によって（jñānacakṣuṣā）私は見たのである。
- (24) サーンキヤ・ヨーガを知る人々は、それを最高我（paramātman）と言った。それは、自らの行為によって偉大なプルシャ（mahāpuruṣa）という名前を得た。
- (25) それより未顕現が生じた。それが第一原因（pradhāna）であると目覚めた人々は知った。世界の創造のために、その自在者たる未顕現より顕現が生じた¹⁵。
- (26) アニルツダは、もろもろの世界では、大きなアートマン（mahān ātmā）と語られる。顕現性を獲得した彼は、祖父を創造した。彼は、自我意識（ahaṁkāra）と呼ばれ、あらゆる活力をそなえている。
- (27) 地・風・虚空・水たち、五番目として火の大元素が、自我意識より生じたのである、バーラタ族の者よ。
- (28) もろもろの大元素を創造した後、さらにそれらのもろもろの性質（guṇa）を創造した。もろもろの大元素から、形あるものたち（mūrtimat）が八種生じた。それらについて聞くがよい。
- (29) マリーチ、アンギラス、アトリ、プラストヤ、プラハ、クラトゥ、偉大なヴァシシュタ、そしてマヌ・スヴァーヤムブヴァである。彼らは八種のプラクリティであると知るべし。世界は彼らに基づいているのである。（Cf.MBh.XII.321.33, 322.27, 327.61; Manu 1.35）

¹² mahābhārata pañcamān Cf. Hopkins [Great Epic]: the epic claims the same title, "fifth Veda", p.53.16.

¹³ kṣīrodayasyānukūlataḥ Ca. anukūlataḥ, kūlasamīpe / (anukūlataḥ とは、岸の近くで、という意味である)

¹⁴ P. yathājñānam B., K.: yathānyānam Cf. Hopkins [Great Epic]: the process of creation in the aniruddha theology, p.137.27.

¹⁵ avyaktād vyaktam utpannam Cv. avyaktāt, avyaktākhyapradhānasrṣter anantaram / (avyaktāt とは、未顕現と呼ばれる第一原因の創造のすぐ後に、という意味である)

- (30) 世界の祖父ブラフマー神は、ヴェーダ支分を伴うもろもろのヴェーダを¹⁶，そして祭式の器具を伴うもろもろの祭式を¹⁷，世界の完成のために創造した。この世界の一切は，八種のプラクリティから生じたのである。
- (31) 怒りを本性として生じたルドラは，別の十のルドラを自ら創造した。この十一のルドラは¹⁸，変異のプルシャたちであると伝えられている。
- (32) 世界の完成のために生じた，これらのルドラたち，プラクリティ，そしてあらゆる神仙たちは，ブラフマー神に近づいた。
- (33) 「私たちは，力あるあなたによって創造されました，至尊者よ。誰がどんな職務 (adhikāra) において活動すべきですか，祖父よ。
- (34) あなたによって，管理する職務が示されました。その管理する者によってその職務はどのように保たれるべきですか¹⁹。
- (35) 職務の管理者の権限を示して下さい。」このように言われた大神は²⁰，これらの神々に次のように言った²¹。
- (36) 「神々よ，よく言ってくれた。汝らに幸いあれかし。汝らの考えた²²このことは私にも生じた懸念 (cintā) である。
- (37) 全世界の運行の²³把握 (parigraha) はどのように行われるべきか。どうすれば，汝らの，そして私自身の，力の衰弱 (balaḥṣaya) は起こらないであろうか。
- (38) ここより，我々は皆で世界の観察者，未顕現の偉大なプルシャに保護を求めに行くことにしよう。彼がよき忠告を我々に語るであろう。」
- (39) そこで，彼ら，そして聖仙たちや神々も，ブラフマー神と共に，世界の安寧のために，乳海の北の岸に行った。
- (40) 彼らは，ブラフマー神によって定められ，ヴェーダに記された苦行に身を置いた。それは大制戒 (mahāniyama) という名の²⁴大変厳しい苦行であった。

¹⁶P.,K.: vedān vedāṅgasamṣyuktān B. vedavedāṅgasamṣyuktān

¹⁷P. yajñān yajñāṅgasamṣyuktān B.,K.: yajñayajñāṅgasamṣyuktān

¹⁸ekadaśa ete rudrās tu Cs. ete rudrāḥ puruṣāḥ, puruṣarūpadhārīṇy ekādaśendriyāṇīty arthaḥ / (ete rudrāḥとは，プルシャたちである。すなわち，プルシャの姿を保持する十一種の感官たちは，という意味である。)

¹⁹P. paripālyah katham tena so 'dhikāro 'dhikāriṇā B.,K.: paripālyah katham tena sāhaṁkāreṇa kartṛṇā

²⁰mahādevo Ca. mahādevaḥ, devebhyo mahattvenotkarṣaṇayogāt brahmaiva / (mahādevaḥとは，神々よりも大きいという性質によって，優勢さを見えることから，ブラフマー神は，という意味である)

²¹B.,K. はこの詩節の後に，brahmovāca を挿入している。

²²P.,B.: yā bhavatām matā K. yā bhavatām iha

²³P.,K.: lokatantrasya kṛtsnasya B. lokatrayasya kṛtsnasya

²⁴sa mahāniyamo nāma Hopkins[1901]: The mahāniyama austerity recognized as "Vedic" consists in standing on one leg, "up-looking" and "holding up arms", with devoted mind for a thousand years of the gods, p.347, fn.1.

- (41) 眼は上を見、腕も上方に挙げ、心は一点に集中した²⁵。彼らは一本足で立ち、まさしく²⁶棒（のごとく）となって瞑想した。
- (42) （神々は）その最高の苦行を神の千年間行って、ヴェーダとヴェーダ支分を語る甘美な声を聞いた²⁷。
- (43) 「おお、ブラフマー神と共にいる神々よ、そして苦行に富む聖仙たちよ、汝らすべてを歓迎する挨拶をして、最上の言葉を聞かせるであろう。
- (44) 余が為すべきことは汝らには知られている²⁸。それは世界の大きな安寧である。活動 (pravṛtti) に関連して、汝らの生命の増進が²⁹なされねばならぬ。
- (45) 神々よ、汝らは余の好意を得んとして、よく苦行を行った。偉大な者たちよ、汝らは、その苦行の最高の果報を得るであろう。
- (46) 世界の人々の師、あらゆる世界の人々の祖父である³⁰このブラフマー神、そして汝らすぐれた神々は、専心して余を祭るべし。
- (47) もろもろの祭式において、汝らすべては常に余の取り分を準備すべし。そうすれば、余は職務に応じて幸福を与えるであろう³¹、自在者たちよ³²。」
- (48) 神々の神のこのような言葉を聞いて、すべての神々、ブラフマー神、そして偉大な聖仙たちは、歓喜のあまり体中の毛が逆立った (hr̥ṣṭatanūruḥāḥ)。
- (49) ブラフマー神は、ヴェーダに見られる規定によってヴィシュヌ神に供犠を捧げようとして、その時そのサットラ祭において、自ら（ヴィシュヌ神の）取り分を準備した。神々と神仙たちも皆、（ヴィシュヌ神の）もろもろの取り分を準備した。
- (50) クリタ・ユガ期のダルマであり³³、最高の歓待である (paramasatkṛtāḥ)、それらもろもろの取り分は、暗闇の彼方にある太陽の色をしたプルシャに、すなわち、広大で、偏在し、支配し、恩寵を与える威力ある神に、達した³⁴。
- (51) するとそこで、恩寵を与え、身体なく、虚空にいる、大自在者たる神は、そこにいる神々すべてに次の言葉を語った。

²⁵P.,B.: ūrdhvaṃ dr̥ṣṭir bāhavaś ca ekāgraṃ ca mano 'bhavat K. ūrdhvaḍṛg bāhavaś caiva ekāgramanaso 'bhavat Sandhi irregular: P.,B.: ca ekāgraṃ; K. caiva ekāgramanaso Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.2. Absence of *praśliṣṭa-sandhi*, 1.1.2.4. -a/ā e-, p.12.12.

²⁶P. samyak kāṣṭabhūtāḥ B.,K.: sarve kāṣṭabhūtāḥ

²⁷この詩節の後に、B. は śrī bhagavān uvāca, K. は vāg uvāca を挿入している。

²⁸vijñātaṃ vo mayā kāryaṃ Ganguli: I know that is in your hearts, p.145.43. Deussen: Bekannt ist euch mein Zweck, p.788, v.50) Esnoul[1979]: Vous savez clairement que je dois assurer un grand bien pour les mondes, p.130, v.50. 中村 [2000] は Ganguli に従っている。(p.952, v.50)

²⁹yuṣmatprāṇopabṛṃhaṇam Cs. yuṣmatprāṇopabṛṃhaṇam, yuṣmatbṛṃhaṇasādhanaṃ atimahattvakaram ity arhtaḥ / (yuṣmatprāṇopabṛṃhaṇam とは、並外れた大きさを作り出す、汝らの増大を達成することが、という意味である)

³⁰P.,K.: sarvalokapitāmahaḥ B. mahān lokapitāmahaḥ

³¹P. tathā śreyo vidhāsyāmi B. tathā śreyo 'bhidhāsyāmi K. tatra śreyo 'bhidhāsyāmi

³²この詩節の後に、B.,K. は vaiśampāyana uvāca を挿入している。

³³kārtayugadharmāṇo Cs. kārtayugadharmāṇaḥ, ahimsādilakṣaṇakṛtasvabhāvāḥ, mantralopatantropakriyālopaḥimsādirahitāḥ, paramasaṃskṛtāḥ / (kārtayugadharmāṇaḥとは、不殺生などの特徴によって作られた本質をもつ、真言の消滅、教典の消滅、祭式の消滅、殺生などのないものであり、最も整ったものである)

³⁴P. prāpur B.,K.: prāhur

- (52) 「誰によってであれ準備された取り分はすべて適切に(余に)達した³⁵。余は、満足した。今や、再生 (āvṛtti) を特徴とする果報を³⁶示すであろう。
- (53) 神々よ、それが私の恩寵より生じる (果報の) 特徴である。汝らは、完全にして卓越した供物をそなえたもろもろの祭式によって祭りつつ³⁷、どのユガにおいても、活動の果報を享受する者となるであろう。
- (54) そして、神々よ、すべての世界においてもろもろの祭式によって祭る人々は、ヴェーダに示されたもろもろの取り分 (bhāgān) を汝らに向けて準備するであろう。
- (55) 余は「この大犠牲祭において余に取り分を準備した者は、それに応じて祭式の取り分に値する者である」とヴェーダ經典に記した³⁸。
- (56) 祭式の取り分を果報とするにかなう汝らは、もろもろの世界を維持すべし。汝らは、世界におけるあらゆる事を管理する者として (sarvārthacintakāḥ)、職務に応じて創造されたのである。
- (57) (人々は) 活動の果報を尊重する祭式を行うであろう。汝らは、それら (の祭式) によって増大した力をもって³⁹、もろもろの世界を維持するであろう (dhārayiṣyatha)。
- (58) 汝らは、世間でのあらゆる祭式において人々によって清められるであろう。それによって余を清めよ。これが汝らに対する余の思い (bhāvanā) である。
- (59) この目的のために、もろもろのヴェーダと祭式は、もろもろの薬草と共に、創造されたのである⁴⁰。これらが地上において (人々によって) 正しく用いられると、神々は喜ぶであろう。
- (60) このように、活動の性質をそなえた汝らの創造 (nirmāṇa) は、劫の滅まで、余が行なうのである。すぐれた神々よ。職務に従って、世界の幸福を考えるべし、自在者たちよ。
- (61) マリーチ、アングラス、アトリ、プラストヤ、プラハ、クラトゥ、ヴァシシュタという七人は、精神的な (息子として) 創造された⁴¹。(Cf.MBh.XII.321.33, 322.27, 327.29; Manu 1.35)
- (62) これらの息子たちは、ヴェーダに通じた主要な存在として、ヴェーダの師として用意された。そして、活動のダルマをもつ者たちとして、生き物を生み出すもの (ブラジャーパティ) の役割をもつのである。
- (63) これは祭式を行う者たちの、明らかにしてな永遠の道である。世界の創造を行う威力ある神はアニルツダと言われる。(Cf.Matsubara[1994]: Aniruddha, as *loka-sarga-kara*, p.122.18)

³⁵P. samupāgataḥ B.,K.: mām upāgataḥ

³⁶phalam āvṛtilakṣaṇam Esnou[1979]: le fruit que caractérise le non-retour (sur la terre), p.131, v.59.

³⁷P.,K.: yūyaṃ yajñair iḥyamānāḥ B. svayaṃ yajñair yajamānāḥ (Cf.Hopkins[Great Epic]: Illustrations of Epic Čloka Form, p.455, No.35)

³⁸vedasūtre mayā kṛtaḥ Cf.Hopkins[Great Epic]: A Vedasūtra, apparently a Č, but perhaps only Veda in general, p.15.28, fn.3.

³⁹tābhir (B. ābhir) āpyāyitabalā Cf.Hara[1987]: “āpyai-”, vocabulary of invigoration, p.145.7.

⁴⁰nirmitā vedā yajñās cauṣadhibhiḥ saha Cf.Hopkins[Great Epic]: God created Vedas, p.4.22.

⁴¹P. mānasā nirmitā hi vai B. mānasā nirmitā hi te K. manasā nirmitā hi te Cf.Hopkins[Great Epic]: eight sources, personified in the personal creation, as “eight sages”, p.170.32.

- (64) サナ, サナトスジャータ, サナカ, サナンドナと共に, サナトクマール, カピラ, そして七番目としてサナータナ,
- (65) これら七人の聖仙は, ブラフマー神の精神的な息子と言われ, 自ずから認識をそなえ, 無活動の⁴²ダルマを行う者たちである。
- (66) ヨーガを知るこれらの偉大な (mukhya) 者たち, そして, 同様にサーンキヤの教義を知る者たちは⁴³, 解脱の聖典における⁴⁴師匠たちであり, 解脱の法 (mokṣadharma) を実行する者たちである。
- (67) 原初に未顕現から三グナからなる「大きなもの」として「私」(aham) が創造された。それ(未顕現)より上位のものは⁴⁵, 「知田者」と呼ばれる⁴⁶。そのような「私」は, 祭式を行う者たちにとって, 再生によって獲得するのは難しい道である。
- (68) 人は, それぞれの行為に従って創造されたとおりに, 活動においてであれ, 無活動においてであれ, その果報を, 否応なく得るのである⁴⁷。
- (69) このブラフマー神は, 世界の師であり, 世界の最初の創造者である威力ある神である。彼は, 汝らにとって母であり, 父であり, 祖父である。彼は将来, 余の指示によってあらゆる生き物に恩恵を与えるであろう。
- (70) その額から生まれた息子ルドラは, ブラフマー神に指示されて, あらゆる生き物に恩恵を与えるであろう⁴⁸。
- (71) 汝らは, もろもろの自分の職務に向かい, 規定に従って処置せよ。すべての祭式は, すべての世界においてすぐに行われるべし。
- (72) 生き物たちのもろもろの行為とそれらの行き先, そして時間の限られたもろもろの寿命が⁴⁹観察されるべし, 最高の神々よ。
- (73) 今やクリタ・ユガという名の最もすぐれた時代 (kāla) が始まる。このユガ期においては, 他 (のユガ) とは違って, 祭式獣は殺されないのである⁵⁰。ここでは, ダルマは四本足の完全なものとなるであろう, 神々よ。

⁴²P. nivṛttaṃ B.,K.: nivṛttiṃ

⁴³P. sāmkyadharmavidas tathā B. sāmkyajñānaviśāradāḥ K. sāmkyasāstraviśāradāḥ

⁴⁴P. mokṣasāstre ca B.,K.: dharmasāstreṣu Cf. Hopkins[Great Epic]: mention of “teachers in Dharmaśāstras”, p.22, fn.1.

⁴⁵tasmāt parataro Cs. paratarah ity atra paraśabdena jīvaḥ samaṣṭirūpo ’niruddhamahāpuruṣādisābdavācyaḥ pañcaviṃśaka ucyate / (paratarahとは, ここでは para という語によって, 集合の性質をもつ命我 jīva が言及されている。命我はアニルツダ, マハーブルシャなどの言葉によって述べられるべき第二十五原理である)

⁴⁶kṣetrajña iti kalpitaḥ Cs. śadvimśo vāsudevaḥ paramātmētiśābdavācyaḥ kṣetrajñaḥ parikīrtitaḥ / (ヴァースデーヴァは第二十六原理であり, 最高我という言葉で述べられるべきもので, 知田者とも称される) Cf. Buitenen[1964]: higher than this (‘large one’) is he who is known as the kṣetrajña, p.218.25.

⁴⁷P.,K.: so ’śnute ’vaśaḥ B. so ’śnute mahat

⁴⁸P. sarvatrasavarapadaḥ B.,K.: sarvabhūtaadharah prabhuh Critical Notes: It is possible to understand the pāda as *sarvatra sa varapadaḥ*; but *sarva-trasa(=prāñijāta)varapadaḥ* seems to be preferable. (P.vol.16, p.2227(left), v.70)

⁴⁹P. parinirmitakālāni āyūṃṣi B.,K.: pariniṣṭhitakālāni āyūṃṣi Sandhi irregular: -kālāni āyūṃṣi Cf. Oberlies[Grammar]: 1.1.3. Absence of *kṣaipra-sandhi*, 1.1.3.1. -i/ī a/ā, p.14.2.

⁵⁰ahimsyāḥ yajñapaśavo Cf. Matsubara[1994]: *ahimsā*, one of the most important teachings in Pāncarātra, p.147, Reference No.38.

(74) それからトレーター・ユガという名の(時代が始まる)。そこでは三種(のヴェーダ)が生じるであろう⁵¹。そこでは獣たちは、清められて、祭式において殺されるのである。ダルマには第四の足は存在しないであろう。

(75) それからドヴァーパラ(・ユガ)という名の混合の時代が生じるであろう。このユガにおいてはダルマは二本の足を欠くであろう。

(76) それからカリ・ユガに先立つティシュヤ月宿の⁵²ユガ期が到来すると、そこではダルマはどこでも一本足でたつであろう。」

神々は言った⁵³。

(77) 一本足で立つダルマがあらゆるところにある時、我らはどのように振る舞うべきですか。至尊者よ、それを我らにお話し下さい。

至尊者は言った⁵⁴。

(78) もろもろのヴェーダ、もろもろの祭式、苦行、真実、そして自制(dama)が、不殺生のダルマと結びついて行われる所に住むがよい、すぐれた神々よ。アダルマは汝らに足で触れることはないであろう。

ヴィヤーサは言った。

(79) 至尊者に教示された神々は、聖仙の群と共に、至尊者に敬礼して、それぞれが望む所へと去った。

(80) 三天の住者たちが去ると、ブラフマー神は、アニルツダの姿をして立っているその至尊の神を見ようと、一人そこに留まった。

(81) 神は、大きな馬頭となって、水瓶と数珠(gaṇitṛa)をもち⁵⁵、ヴェーダ支分とともにもろもろのヴェーダを詠じつつ、彼に姿を示した。

(82) それから、世界の創造者たる威力あるブラフマー神は、馬の首をした無限の光輝をもつその神を見て、もろもろの世界の安寧を望んで、

(83) ブラフマー神は、恩恵を与える神に頭を下げて敬礼し、合掌して神の前に立った。すると神はブラフマー神を抱擁した後、次の言葉を語った⁵⁶。

⁵¹ trayī yatra bhaviṣyati Cs. trayī yatra bhaviṣyati, pravṛttidaharmaparā vedā yatra bhaviṣyanti / (trayī yatra bhaviṣyati とは、活動のダルマを最高とするもろもろのヴェーダが、そこでは生じるであろう、という意味である)

⁵² tiṣṭye Cv. tiṣṭye, puṣyanakṣatre / (tiṣṭye とは、プシュヤ宿の、という意味である) Cf. Hopkins[Great Epic]: tiṣṭya, as the name of Kali, p.3, fn.3.

⁵³ devā ūcuḥ B. は devā ūcuḥなしに、K. は devā ūcuḥの後に、次の1行を挿入している。(=MBh.XII.866*)

devā devarṣayaś cocu tam evaṇvādināṃ gurum / (神々と神仙たちは、このように話す師に言った。)

⁵⁴ K. はこの語の後に次の2行を挿入している。(=MBh.XII.867*)

guravo yatra pūjyante sādhuṣṛtāsamanvitāḥ (867* sādhuṣṛtāḥ śamānvitāḥ) /

vastavyaṃ tatra yuṣmābhir yatra dharmo na hīyate /86/

(汝らは、善行をそなえた師たちが敬われる所、ダルマが欠けない所に、住むべし。)

⁵⁵ P. kamaṇḍalugaṇitradhṛk B., K.: kamaṇḍalutridaṇḍadhṛk Ca., Cs.: (gloss: akṣamālādharāḥ) -gaṇitradhṛk (as in text) (ビーズのネックレスをした) Critical Notes: gaṇitṛa, rosary, p.2227(left), v.81d.

⁵⁶ この詩節の後に、B. は śrībhagavān uvāca を、K. は bhagavān uvāca を挿入している。

- (84) 「汝は、世間で為されるべきもろもろの道を、すべて規範に従って処置せよ。汝はあらゆる生き物の創造者である。汝は世界の王 (prabhu) にして師である。汝にこの重荷を引き渡した余は、ほどなく満足を得るであろう⁵⁷。
- (85) 汝が神の行為を行うことができない時には⁵⁸、余は、アートマンの知識を教示する者として現われるであろう⁵⁹。」
- (86) このように言って、馬頭の神は、そこで姿を消した。彼に教示されたブラフマー神もまた間もなく自分の世界へと去った。
- (87) かくして、大きな幸運をもち蓮華を臍とする永遠の神は、もろもろの祭式において最初に (取り分を) 取る者であり、常に祭式を維持する者である、と言われるのである。(Cf.MBh.XII.327.1)
- (88) 彼は、不滅に向う者たちの道 (gati) として無活動のダルマを定め (āsthitaḥ), 世界を多様にした後、もろもろの活動のダルマを定めたのである⁶⁰。
- (89) 彼は、生き物たちの最初であり、中間であり、最後である。(Cf.MBh.XII.330.25a) 彼は創造者であり、創造される物である。彼は行為者であり、為されるべき行為である。彼は、ユガの終りにもろもろの世界を完全に滅して眠り、ユガの始めに目覚めて世界を創造するのである (utsasarja)。 (韻律: Bhujaṅgaprayāta⁶¹)
- (90) 汝らは、その神に敬礼せよ。グナなく、グナの本性であり⁶²、誕生なく、一切の姿であり、あらゆる天界の住者たちの住居である、その神に。
- (91) 大元素の支配者に、ルドラ神群の主に、アーディトヤ神群の主に、そしてヴァス神群の主に (敬礼せよ)。
- (92) アシュヴィン双神の主に、マルト神群の主に⁶³、ヴェーダと祭式の支配者に、そしてヴェーダ支分の主に (敬礼せよ)。
- (93) 常に海に住む者に、ハりに、ムンジャ草を鬚とする者に⁶⁴、寂靜の者に、あらゆる存在の解脱の教えを説く者に (敬礼せよ)。

⁵⁷dhṛtiṃ prāpsyāmy athāñjasā Ganguli: I shall soon be free from anxiety, p.149.4. Deussen: werde ich ihres Bestehens ohne Schwierigkeit sicher sein, p.792, v.96. Esnoul[1979]: j'obtiendrai immédiatement satisfaction, p.135, v.96.

⁵⁸te aviśahyaṃ bhaviṣyati Sandhi irregular: *te aviśahyaṃ* Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.5. Absence of *abhinihita-sandhi*, 1.1.5.1. -e a-, p.20.2.

⁵⁹K.はこの詩節の後に *vyāsa uvāca* を挿入している。

⁶⁰pravṛttidharmān vidadhe kṛtvā lokasya citratām Cf.Hopkins[Great Epic]: in the religious substitution of a personal Lord, Īṣvara, as synonymous with the Supreme, it is taught that “the Lord created pravṛtti as a picturesque effect” (after electing nivṛtti for himself), p.103.5, fn.1.

⁶¹Cf.Hopkins[Great Epic]: Bhujaṅgaprayāta, a jagatī, appearing in the middle of the chapter, p.324.1.

⁶²P. devāya nirguṇāya guṇātmane B.,K.: devāya nirguṇāya mahātmane Cf.Hopkins[Great Epic]: The Supreme Spirit is devo (nirguṇaḥ), as in Çvet.Up. i, 8, p.37, fn.2.

⁶³asvibhyāṃ pataye caiva marutāṃ pataye tathā / Cf.Hopkins[Great Epic]: *asvibhyāṃ pataye caiva marutāṃ pataye tathā*, Dialectic Sanskrit, syntactical confusion, p.265.17.; Gonda[1969]: Viṣṇu is called their (Maruts) lord, p.109.35; Oberlies[grammar]: 10.3.4. Syntax of cases: The dative, dative forms in definitely genitive function, (*asvibhyāṃ*), p.332.3.

⁶⁴muñjakeśine Cs. muñjakeśine, kapilarūpāya / muñjavat dīrghā vā, suvarṇavarṇā vā / (muñjakeśine とは、赤い色をした者に、という意味である。あるいは、ムンジャ草のように長い、あるいは黄金の色をした (鬚をもつ者に)、という意味である)

- (94) もろもろの苦行と威力の主、また名誉の主、永遠に言葉の主である者に、河川たちの主に（敬礼せよ）。
- (95) 卷髪（ルドラ）に、猪に、一角の者に⁶⁵、英知ある者に、太陽に、馬頭に、常に四つの姿をもつ者に（敬礼せよ）。
- (96) 秘密の者に⁶⁶、知によって見られるべき者に、不滅の者に⁶⁷、そして滅する者に（敬礼せよ）。この神は、遍在不変なものとして存在するのである（samcarati）。
- (97) このようにかつて私は知眼によって見た⁶⁸。私は問われたので、そのすべてを正しく汝らに語ったのである。
- (98) 弟子たちよ、我が語を行え。自在者たるハリに仕えよ。もろもろのヴェーダの言葉によって讃えよ。規定どおりに礼拝せよ。」

ヴァイシャンパーヤナは言った。

- (99) 英知あるヴェーダの編者（ヴィヤーサ）は、我々すべての弟子と、最高のダルマを知る息子のシュカに、このように言った。
- (100) その我々の師は、我々と共に、人々の主よ、四ヴェーダにあるもろもろの讃歌によってかの神を称賛した⁶⁹。
- (101) かくしてあなたが私に尋ねたことはすべて説明した。かつてこのように、王よ、師ドヴァイパーヤナは私に語ったのである。
- (102) 至尊者に敬礼し、心集中してこれを聞く者は、そしてこれを常に賞讃する者は、
- (103) 病なく、輝きをもち、力と容姿をそなえるであろう。また、病あれば病から解放され、束縛あるならば束縛から解放されるであろう。
- (104) 願望ある者は、願望を得るであろう。そして長寿を得るであろう。バラモンは、あらゆるヴェーダを知る者となろう。クシャトリアは勝利者となり、ヴァイシャは富を獲得し、シュードラは幸福（sukha）を得るであろう。

⁶⁵ekaśṛṅgāya Cs. ekaśṛṅgāya, matsyarūpāya / (ekaśṛṅgāya とは、魚の姿をした者に、という意味である)

⁶⁶P.,B.: guhyāya K. sūkṣmāya

⁶⁷jñānadṛśyāya akṣarāya Sandhi irregular: jñānadṛśyāya akṣarāya Cf. Oberlies[Grammar]: 1.1.1. Absence of *savarṇa-sandhi*, 1.1.1.1. -a/ā a/ā-, p.2.11.

⁶⁸B.,K. はこの行の前に次の一行を挿入している。

eṣa caitat paraṁ brahma jñeyo vijñānacakṣuṣā /

(かくして、これが最高のブラフマンと、知眼によって知られるべし。)

⁶⁹P. caturvedodgatābhiṣ ca ṛgbhis tam abhitsuṣṭuve / B.,K.: caturvedodgatābhis tam ṛgbhiḥ samabhituṣṭuve / Sandhi irregular: ca ṛgbhis Cf. Oberlies[Grammar]: 1.1.2. Absence of *praśliṣṭa-sandhi*, 1.1.2.3. -a ṛ-, p.9.12. B.,K. は、不規則な sandhi を回避したか。

- (105) 息子なき者は息子を得るであろう。娘は望ましい夫を得るであろう。胎児の固着した女は(胎児から)解放されるであろう。妊婦は息子を産むであろう。石女は息子と孫にあふれた子孫を得るであろう⁷⁰。
- (106) 道中でこれを詠む者は、安全に道を行くであろう。願いある者は、必ずその願いを得るであろう。
- (107) 偉大な聖仙の語った確固としたこの言葉、すなわち偉大なすぐれたプルシャの賞讃を⁷¹、そして聖仙と天の住者たちのこの集会を聞いて、帰依する者たちは、大きな安楽を得るであろう。(韻律: Vamśasthavila 不規則⁷²)

[328 章]⁷³(B.341 章, C.13129-13187, K.350 章) (ナーラーヤナ章 (8) 神名の由来)

ジャナメージャヤは言った。

- (1) ヴィヤーサは弟子たちと共にこのマドゥの殺害者をさまざまな名前で讃えました⁷⁴。それらの名前の由来 (nirukta) を、至尊者よ、私に、
- (2) お話し下さい。創生主の主ハリ (の由来) を聞くのを願っている私に。それを聞いた後には、私は清められ、秋の月のように汚れなき者となるでしょう。

ヴァイシャンパーヤナは言った。

- (3) 王よ、清浄な自己をもち威光あるハリが、パルグナ (アルジュナ) に対し、どのように自分の性格と行為に基づく (guṇakarmajam) 諸名の由来を語ったかを、聞くがよい。
- (4) その偉大なケーシャヴァを賞賛するもろもろの名称に関して、王よ、敵の勇者を殺すパルグナ (アルジュナ) はケーシャヴァに尋ねた。

アルジュナは言った。

- (5) 至尊者よ、過去と未来の支配者よ、あらゆる生き物の創造者よ、不変なる者よ、世界の棲家よ、世界の保護者よ、世界の人々に無畏を与える者よ、
- (6) 神よ、偉大な聖仙たちによって語られるあなたの諸名、プラーナを含むもろもろのヴェーダの中では⁷⁵、もろもろの行為に秘められた諸名、

⁷⁰vandhyā prasavam āpnoti putrapautrasamṛddhimat 名詞 (prasava, m.) と形容詞 (putrapautrasamṛddhimat, n.) の性が一致しないのは、音節数の制限のためか。(Cf.Oberlies[Grammar]: 10.2.1. Lack of concord between adjective and substantive, (I) as to gender, p.292.4) Hopkins[Great Epic]: those who are exhorted to hear the recital of the epic, p.2, fn.1.

⁷¹P. puruṣavarasya kīrtanam B.,K.: puruṣavarasya kīrtitam

⁷²a,c 句: Vamśasthavila (=Upajāti+1 音節), b 句: 13 音節, d 句: 11 音節 (Upajāti)

ただし、b 句 (— — — — —) の第 5 第 6 の短音節を合わせて一つの長音節と見なせば、 — — — — — と 12 音節となり、a,c 句と同じ Vamśasthavila になる。 Cf.Hopkins[Great Epic]: Mora Trīṣṭubhs, mixed Upajāti, p.303.17.

⁷³Cf.Matsubara[1994]: Concept of the Supreme God, the name Brahman not found in MBh.XII.328.35-51, p.105, Reference No.1)

⁷⁴P.,B.: astauṣīd yair imaṃ K. astauṣīd vaidikair

⁷⁵vedeṣu saprāṇeṣu Cf.Hopkins[Great Epic]: Vedas, Purāṇas, Aṅgas, and Upāṅgas are sometimes grouped together, p.14.2. ; Cf.MBh.XII.321.24

- (7) それらの由来をあなたから聞きたいのです，ケーシャヴァよ。なぜならば，威力ある者よ，あなた以外に，諸名の由来を語るこのことができる者は⁷⁶他にはいないのですから。

聖なる至尊者は言った。

- (8) ヤジュル・ヴェーダと共に，リグ・ヴェーダにおいて，そしてアタルヴァ・ヴェーダとサーマ・ヴェーダにおいて，ウパニシャッドと共に，プラナーナにおいて，そして天文学書 (jyotisa) において，アルジュナよ，
- (9) サーンキヤにおいて，ヨーガ聖典において⁷⁷，そしてアーユルヴェーダにおいて⁷⁸，偉大な聖仙たちによって多くの余の名前が語られた⁷⁹。
- (10) そこには性格に基づく諸名と，行為より生じた諸名とがある。行為より生じた諸名の由来について余が語ることを専心して聞くがよい，汚れなき者よ。というのは，汝はかつて余の半身であったと伝えられているからである。
- (11) 大きな栄光をもつ者に敬礼せよ。身体ある者たちの最高我に，ナーラーヤナに，遍在者に⁸⁰，グナなき者に，グナを本性とする者に敬礼せよ⁸¹。
- (12) その者の恩恵からブラフマー神が生まれ，その者の怒りよりルドラが生じた。それは一切の動かぬ者，動く者の源である⁸²。
- (13) 十八の属性からなるものが最高存在 (sattva) である⁸³，命ある者 (sattvavat) たちの中で優れた者よ。それは余の最高のプラクリティである。余のプラクリティは，天と地をヨーガによって保持し⁸⁴，天則にかなない，真実であり，不死であり，打ち勝ちがたいものであり，世の人々のアートマンとして知られている。
- (14) それからあるゆる創造・帰滅・変異が生じる。そして⁸⁵祭式，祭主，太古のブルシャ，支配者ヴィラージが生じる。それはアニルッダと言われ，もろもろの世界の創造と帰滅である。

⁷⁶P. vartayen nāmnām B.,K.: varṇayen nāmnām

⁷⁷sāṃkhye ca yogaśāstre ca Cf.Hopkins[Great Epic]: Vedic practices and the existence of God are claimed for Sāṃkhya and Yoga, as if they were one system, p.100.29.

⁷⁸ca āyurvede tathāiva ca Sandhi irregular: ca āyurvede Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.1. Absence of *sarvaṇa-sandhi*, 1.1.1.1. -aā a/ā-, p.2.11. Cf.Hopkins[Great Epic]: ; in relation to the title “fifth Veda”, p.53, fn.4.

⁷⁹bahūni mama nāmāni kīṭitāni Cf.Hopkins[Great Epic]: “The many names of God are declared in the Rigveda with Yajur Veda, ..., and in āyurveda”, to give the bizarre group, p.100.31.

⁸⁰viśvāya Cf.Oberlies[Grammar]: 4.7.2. *anya-*, *itara-*, *eka-*, *pūrva-* and *viśva-* sporadically do not inflect as pronominal adjectives, (dat.sg. m./n.), p.111.5.

⁸¹Cs. vaiśampāyanah śrīkṛṣṇam eva nirguṇam paramātmānam anena ślokena stutavān / (ヴァイシャンプアーヤナは，この詩節によって，聖なるクリシュナをグナなき最高我として賞賛した)

⁸²yo 'sau yoniḥ Cs. tasmai namaḥ iti pūrveṇa sambandhaḥ / ((yah)は) namaḥ tasmai(v.11a) その者を敬礼せよ，というように前詩節 (の tasmai) と関連している)

⁸³aṣṭādaśaguṇam yat tat sattvam Cf.Hopkins[Great Epic]: sattva, here having eighteen guṇas, no uniformity in the teaching of the epic, p.119.24.; “Indestructible Brahman” (like Sattva) is eighteenfold, p.143, fn.2.

⁸⁴P.,B.: yogadhāriṇī K. lokadhāriṇī Cn. yogena lokān dhārayatīti yogadhāriṇī / (彼は，ヨーガによってもろもろの世界を支えるので，yogadhāriṇīと言われる)

⁸⁵P. tato B.,K.: tapo

- (15) ブラフマンの夜が終りに至ると、その無限の威力を持つ者の恩寵によって⁸⁶、蓮が生じた、蓮のごとき目をもつ者よ⁸⁷。そしてそこにブラフマー神が誕生した。彼(ブラフマー神)はまさしく彼の恩寵によって生まれたのである。
- (16) そして(ブラフマンの) 昼が終わると、怒りにとりつかれた神の額から息子、すなわち帰滅を引き起こすルドラが生まれた。
- (17) 恩寵と怒りから生じたと伝えられているこのすぐれた二柱の神は、彼(アニルツダ)によって示された二つの道、すなわち創造と帰滅を行なうのである。あらゆる生き物に恩恵を与えるこの両神は、この点に関しては、(アニルツダの) 単なる道具でしかない (nimittamātram)。
- (18) ルドラは、巻き髪をした者、髪を束ねた者、剃髪の者、墓地という家に住む者であり、恐ろしい誓いをもつヨーガ行者であり、三都市を恐れさせる者である⁸⁸。
- (19) ルドラは、ダクシャの祭式を破壊し、バガの目を破壊する。しかし彼は、いずれのユガ期においても、ナーラーヤナを本性する者であると知るべきである、パーンドゥの子よ。
- (20) 神々の神である大自在神が敬われる時には、プリターの子よ、威光ある神ナーラーヤナも共に敬われるのである。
- (21) なぜならば、パーンドゥの息子よ、余はもろもろのすべての世界のアートマンであるから。それ故、余は最初に自分自身に他ならないルドラを礼拝するのである。
- (22) もし余が恩恵を与える支配者シヴァを⁸⁹崇拝しないならば、誰も余を崇拝しないであろう⁹⁰、というように余の心は定まっている⁹¹。実に世界は、余が作った基準 (pramāṇa) に従うのである。
- (23) もろもろの基準は崇拝されるべきである。それゆえ、余は彼(ルドラ)を崇拝するのである。彼を知る者は、余を知る。彼に従う者は、余に従うのである⁹²。(Cf.MBh.XII.330.64)
- (24) ルドラとナーラーヤナは、二つになった単一の存在であり⁹³、あらゆる行為の中に顕現して、世界の中で活動するのである、クンティーの子よ。

⁸⁶prasādāt Ca. prasādāt, ātmadhyānāt / (prasādāt とはすなわち、アートマンの瞑想によって、という意味である)

⁸⁷P.,B.: padmaṇ padmanibhekṣaṇa K. padmaṇ arkanibhaṇ kṣaṇāt

⁸⁸P.,K.: tripuradāruṇaḥ B. paramadāruṇaḥ

⁸⁹vai īśānaṇ varadaṇ śivam Sandhi irregular: vai īśānaṇ Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.4. Absence of *udgrāha-sandhi*, 1.1.4.9. -ai i-, p.19.6. ただし 1.1.4.9. は -ai i-であって、-ai ī-のケースは言及されていない。

⁹⁰ātmānaṇ nārcayet kaścid Cv. ātmānaṇ paramātmānaṇ mām evārcayet / atas tām mohayitum rudrārcā mayā kṛtā / ahaṇ tu rudranāmakaṇ rudrāntaryāmiṇaṇ ātmānaṇ paramātmānaṇ mām eva pūjayāmi, na tu rudram / (ātmānaṇ, すなわち、最高我である余をこそ崇拝すべきである。従って、彼らを惑わすために、余はルドラの崇拝を実行した。しかし余は、ルドラの名前をもち、ルドラの内制者である ātmānaṇ, すなわち、最高我を、すなわち自分自身を、崇拝するのであって、ルドラを崇拝するのではない。)

⁹¹P. iti me bhāvitāṇ manah B.,K.: iti me bhāvitātmanah

⁹²yo 'nu taṇ sa hi mām anu Cs. yo 'nu taṇ, taṇ anuvartate, tasya bhakta ity arthaḥ / (yo 'nu taṇ とは、彼に従う者は、すなわち、彼に帰依している者は、という意味である。)

⁹³sattvam ekaṇ dvidhākṛtam Cs. ekaṇ, matto bhinnam—eke mukhyānyakevalā ity amaraḥ (3.3.16) / tatra svarūpabhūtaṇ sattvaṇ nārāyaṇety ākhyayā tiṣṭhati, sattvaguṇākhyayāṇ sattvaṇ tu rudrety ākhyayā / yad vā, ekaṇ mamaiva sattvaṇ sāmartyam / (ekaṇ とは、私とは異なる、という意味である。アマラコーシャによれば「一つとは、主な、別な、単一なこと」である。そこでは、自らの本質である存在は、ナーラーヤナと呼ばれるものとして存在する一方、本性の性質と呼ばれる存在は、ルドラと呼ばれ(て存在する)るのである。あるいは、私にとっては一つの実在であるが、その能力がある、という意味である) Cf.Hopkins[Great Epic]: Rudra and Viṣṇu are being sattvam ekaṇ, divided in two, p.97, fn.2.

- (25) パンドウの息子よ、余に対しては誰も恩恵を与えることはできない、と考えて、息子を得るために、余は、太古の一切者であり自在者である⁹⁴自分を、自ら⁹⁵心から崇拝したのである。
- (26) なぜならば、ヴィシュヌは、自分自身を除いてはいかなる神のためにも礼拝しないからである。それ故、余はルドラを敬うのである。
- (27) 神々は、ブラフマー神、ルドラ、インドラ、聖仙たちと共に、最高の神ナーラーヤナ・ハリを崇拝する。
- (28) 未来の人々の、現在の人々の、過去の人々の、バーラタ族の者よ、すべての人々の先導者であるヴィシュヌは、常に仕えられ、崇拝されるべきである。
- (29) 供物を与えるヴィシュヌに敬礼せよ。保護を与えるヴィシュヌに敬礼せよ。クンティーの子よ、恩恵を与えるヴィシュヌに敬礼せよ。神や祖霊への供物を享受するヴィシュヌに敬礼せよ。(Cf.MBh.XII.327.7d)
- (30) 余に帰依する人々は四種類である。このように汝も聞いていよう⁹⁶。彼らの中で、専一に帰依する者たちが⁹⁷最高である。彼らは(余の他に)他の神格をもたない。余は、彼ら願望なく行為する者たちの⁹⁸道である。
- (31) 他の三種の帰依する者たちは、果報を望んでいると考えられる。彼らはすべて動揺を性質としてもっている。しかし(彼らの中で)目覚めた者は、最高のものを享受するのである。
- (32) 覚醒したすぐれた者たちは、ブラフマー神と青頸のシヴァ、そして他の神格として伝えられる神々に仕え、そして最高の存在である余に至るであろう。帰依した者についてこのような相違が汝に語られた、プリターの子よ。
- (33) 汝と余は、クンティーの子よ、ナラとナーラーヤナとして伝えられている。(大地の)重荷を降ろすために、(我々は)人間の体に入ったのである。
- (34) 余は、自分についてもろもろの関連することを(adhyātmayogān)知っている。余が誰であり、どこから来たのかを、バーラタ族の者よ。そして無活動を特徴とするダルマは繁栄をもたらすものである。
- (35) 唯一にして永遠である余は、人々の道(narāṇām ayanam)と言われる。水たちは「ナーラー」(人々)と言われる。水たちはまさにナラの子供たちである。それはかつて余の住居(ayana)であった⁹⁹。それゆえ余はナーラーヤナ(水を住居とする者)と言われる。(Cf.Manu 1.10, Matsubara[1994]: concept of Nārāyaṇa, associated with water, p.101.22)

⁹⁴P. purāṇaṃ viśvam īśvaram B.,K.: purāṇaṃ rudram īśvaram

⁹⁵P. ātmānam aham ātmanā B. ayam ātmānam ātmanā K. aham ātmānam ātmanā

⁹⁶P. evaṃ hi te śrutam B.,K.: evaṃ hi me śrutam

⁹⁷ekāntinaḥ Cs. ekasmin mayi vāsudeve ekasya dhāraṇo nirṇayo yeśām aham eva vāsudeva iti ekāntinaḥ / (ekāntinaḥとは、ekasmin 唯一者において、すなわち、私において、すなわち、ヴァースデーヴァにおいて、ekasya 唯一であることの保持が定まっている人々にとって、ヴァースデーヴァとは私に他ならない、という意味である)

⁹⁸nirāśīḥkarmakāriṇām Cs. nirāśīḥ, kāmyakarmakāriṣu nātīva prītimān ity arthaḥ / (nirāśīḥとは、もろもろの好ましい行為をするときに、特に喜ぶことはない、という意味である)

⁹⁹P.,B.: ayanam mama tat pūrvam ato K. ayanam mama tāḥ pūrvam ato Manu 1.10: tā yad asyāyanam pūrvam tena 類似した表現が見られる箇所については、Matsubara[1994], p.114, Reference No.136 において列挙されている。

- (36) 余は、存在するや、全世界を覆うのである。あたかも 太陽がもろもろの光線によって全世界を覆うかのごとくに。¹⁰⁰余はあらゆる生き物の住居 (adhivāsa) である。それ故、余はヴァースデーヴァ (という名で呼ばれるの) である¹⁰¹。(Cf.MBh.XII.335.87)
- (37) 余はあらゆる生き物たち、そしてその子孫たちの¹⁰²帰趨である、バーラタ族の者よ。余は天地を満たし¹⁰³、プリターの子よ、余の輝きはいよいよ大きいのである。
- (38) 生き物たちは、最後には余である¹⁰⁴。余はそれを望みつつ存在しているから¹⁰⁵、バーラタ族の者よ、また歩みからも、プリターの子よ、ヴィシュヌと呼ばれる¹⁰⁶。
- (39) 自制によって (damāt) 成就を望む人々は、天であり、地であり、空間である余 (に到達するの) を望む。それゆえ、余はダーモダラ (と呼ばれるの) である¹⁰⁷。
- (40) 食物、もろもろのヴェーダ、水たち、そして甘露は、プリシュニ (斑牛) と言われる。これらはいつも余のガルバ (母胎) にある¹⁰⁸。それゆえ余はプリシュニガルバ (と呼ばれるの) である。
- (41) かつて聖仙たちが余にトリタが井戸に落ちたことを告げた。「プリシュニガルバよ、エーカタとドヴィタによって落されたトリタを助けて下さい」と。
- (42) すると、ブラフマー神の最初の息子にして優れた聖仙であるトリタは¹⁰⁹、プリシュニガルバに呼びかけることによって、井戸から上がることができた。
- (43) もろもろの世界を熱する太陽の、火の、そして月の、輝く光線たちは、余の髭 (keśa) と呼ばれている。このために、一切を知るすぐれた再生族たちは、余をケーシャパと呼んだ¹¹⁰。
- (44) 偉大なウタティヤは自らの妻の中に胎児を置いた。ある時、ウタティヤが神の幻力によって¹¹¹姿を消すと、プリハスパティはウタティヤのその妻に会った、バーラタ族の者よ¹¹²。

¹⁰⁰chādayāmi jagad viśvaṃ bhūtvā sūrya ivāṃśubhiḥ Ganguli, Esnoul は、「太陽のごとくとなって、我が光線によって世界を覆うのである」と解している。(Ganguli, p.153.17; Esnoul[1979], p.144, v.41)

¹⁰¹sarvabhūtādhivāsāś ca vāsudevas tato hy aham Cf.Matsubara[1994]: immanence, the outstanding characteristic of Vāsudeva, against Viṣṇu, the original priority of transcendence and omnipresence, p.94.4.

¹⁰²P. sarvabhūtānām prajānām cāpi B.,K.: sarvabhūtānām prajānāś cāpi

¹⁰³P.,B.: vyāptā me rodasī K. vyāpte me rodasī Cf.Gonda[1969]: according to Hinduistic opinions, the name of the god derives from the root viś- “to enter, to pervade”. The term *vyāptā* is explained by Nīlakaṇṭha with the linguistic argument using the root *viś-*, p.65.19; Matsubara[1994]: the *vyāpaka*, all-pervasive nature of Viṣṇu, p.89.25.

¹⁰⁴P. adhibhūtāni cānte 'haṃ B. adhibhūtāni cānteṣu K. adhibhūtaniviṣṭāś ca N. adhibhūtāni sarvaṇi prāṇijātāni divyādivyāny anteṣu dehāvāsāneṣu / (adhibhūtāni とは、あらゆる生き物として生まれた者たち、神と神でない者たちは、という意味である。anteṣu とは、もろもろの身体を終りににおいて、という意味である)

¹⁰⁵P.,B.: tad icchaṃś cāsmi K. tad viśvaṃ cāsmi K. は、P.,B. に見られる語根-*iṣ*の現在分詞 *icchan* にはない、*vi* の音を入れて *cd* 句のヴィシュヌの名称の語源的説明につなげようとしたか。

¹⁰⁶kramaṇāc cāpy ahaṃ pārtha viṣṇur ity abhisamjñitah Cf.Matsubara[1994]: the feature of of the Vedic Viṣṇu, three strides, utilized to explain the name itself, p.91.24.

¹⁰⁷dāmodaro hy aham Ca. dāmini udare manasi kurvanti, dhyāyanti dāmodarah / (人々が、dāmini 綱において、udare, すなわち、心に、抱く、すなわち、瞑想する、ということから、ダーモダラ (綱に心が向く者) である) *dāmodara* は、「綱を腹に巻かれた者」を意味するクリシュナの異名である。

¹⁰⁸P. mamaitāni sadā garbhe B.,K.: mamaitāni sadā garbhaḥ

¹⁰⁹P. ādyo ṛṣivaras tritaḥ B.,K.: ādyo hy ṛṣivaras tritaḥ (*hy*, hiatus breaker) Sandhi irregular: *ādyo ṛṣivaras* Cf.Oberlies[Grammar]: 1.2. Special cases of *sandhi*, 1.2.1 -o ṛ- < /-as ṛ-/ , p.23.1)

¹¹⁰Esnoul[1979] には P.vv.44-50 の訳が欠落している。(p.145)

¹¹¹P.,B.: devamāyayā K. devatājñayā

¹¹²P. bhārata B. mahātmanah K. dhīmataḥ

- (45) その時、クンティーの子よ、交わりのために近づいたそのすぐれた聖仙に、五元素からなる¹¹³胎児は言った。
- (46) 「私が先に来ました、恩恵を与える者よ。あなたは母を苦しめてはならない。」プリハスパティはこれを聞いて、怒り、そして呪った。
- (47) 「私は、交わりのために近づいたのに、汝によって妨げられた。このため、私の呪いによって、汝は盲人として生まれるであろう。このことに疑いはない。」
- (48) 彼は、最高の聖仙の呪いによって、長い間暗闇に入った (upeyivān)。そのため実にその聖仙はかつてはディールガタマス (「長期の暗闇をもつ者」) という名前であった。
- (49) 彼は、ヴェーダ支分と補助支分と共に、永遠の四ヴェーダに到達して、そこで、余のこの秘密の名前を発した。
- (50) 彼は、正しい規則に従って「ケーシャヴァ」と繰り返し (発した)。すると彼は視力をもつ者となり、再びガウタマと (呼ばれるように) なった¹¹⁴。
- (51) このように、アルジュナよ、余のケーシャヴァという名は、あらゆる神々にも、偉大な聖仙たちにも恩恵を与えるのである。
- (52) ソーマと結びつくアグニは、一つの源をもつ者として作られた口である¹¹⁵。それゆえ、動くもの・動かぬものからなる全世界はアグニとソーマを本質としている¹¹⁶。
- (53) [1] 古譚においても、[2] アグニとソーマは、一つの源 (をもつこと) を本性としている。[3] 神々は、アグニを口としている、とされている。[4] そして、一つの源をもつ故に、互いに敬い¹¹⁷、もろもろの世界を維持する、とされている。

¹¹³P.,B.: pañcabhūtasamanvitāḥ K. pañcabhūtaguṇātmakāḥ

¹¹⁴gautamaś (B. gotamaś) cābhavat punaḥ N. gotamaḥ gośabdena cakṣur ucyate cakṣumattama ity arthaḥ / (go という語によって、眼が言われている。最もよき眼をもつ者と、という意味である)

¹¹⁵P. ekayoni mukhaṁ kṛtam B. ekayonitvam āgataḥ K. ekayonir mukhaṁ kṛtam

¹¹⁶P. agniśomātmakam B.,K.: agniśomamayam Ganguli: The object of this verse, the commentator says, is to explain the meaning of the word *Hrishikesa*, p.154, fn.1. Deussen は、Bṛhad Up.1.4.6 の参照を指示している。(p.800, v.58)

¹¹⁷P. mahayanto B. arhanto K. harṣayanto N. ekayonitvam vinā bhoktrbhogyabhāvāsambhavaḥ anyathā vāyagniyonyoḥ sparśacakṣuṣor api bhogyabhoktrbhāvaḥ syād ity āśayenāha parasparam arhanta iti bhoktrbhogyatvam iti śeṣaḥ / (一つの源をもつという性質なしには、享受者 (アグニ) と被享受者 (ソーマ) という関係は生じない。そうでなければ、風と火を源とする皮膚と眼もまた、享受者と被享受者という関係となる、ということ配慮して、parasparam arhantas 互いに敬う、と言われた。享受者と被享受者であることを (敬う)、と補われるべきである)